

# 大野地区公民館

(垂水市大野地区)

垂水市街地から山手へ進み、標高550メートルの山間部に大野地区はある。ここ大野は、1914年の桜島の大噴火により、島民と旧垂水村民542人が入植して作られた、比較的歴史の浅い地区である。山間部を切り拓きながらの村形成は難航を極めたであろうが、今も大野に息づく“助け合い”と“連帯感”が生まれ、奉仕作業や基幹産業でもあった炭をつくる炭窯建設なども、区民が話し合っただけで計画を立て、実践に移した。入植から100年を過ぎた今、大野は地区公民館を軸に「福祉・教育」「産業」「住環境」と部門を分け、何かしらの分野で区民が参加していく仕組みが息づき、「大野地区地域振興計画」を柱に地区の活性化に取り組んでいる。

## 大野地区公民館の主な取り組み

大野の人口は1984年の330人から年々減少し、過疎が進行して、2006年には大野小中学校が閉校、2011年には123人になり、「このままでは大野がなくなる」と危機感が生じていた。2010年に策定された「大野地区地域振興計画」での一番の目標は“大野の人を増やしたい”ということだったが、ただ数年先のことを計画するのではなく“10年後のありたい姿”を描こうと策定された。また幸いなことに大野には鹿児島大学農学部の演習林があったことから交流があり、この縁で同校跡に「大野ESD自然学校」構想を提案された。これで学生さんとの縁が深まり、30年ぶりに青年部を復活するまでになった。この若手のメンバーとともに、まず住環境の整備と空き家の改修を行い、さらに収入源もつくろうと、さつま芋の増産をすべく遊休地や貯蔵施設の整備、水にも恵まれた地区なのでニジマスの養殖なども行うようになり、インターネットでの販売も見据えて、大野のブランドづくりにも邁進している。

大野地区公民館の館長、前田清輝さんは語る。「こうした10年先を見据えた計画と取り組みには垂水市との協力関係が不可欠でした。市の熱心な対応により市所有の施設利用や交付金の面などでは共に知恵を出し合い、共に動いたという経緯もあります。ただ予算に関してはもちろん潤沢なものではなかったもので、自分たちが出来るところは自分たちで実施し、計画に関しても、シンクタンクに頼らず、地域に根差したものを策定しています。この活動は、各種表彰を受け、助成金は大野の人気商品である『つらさげ芋』のさらなる品質向上を目指し、無駄な機械投資を無くし、誰でも共同利用できるトラクターや、糖度を増すためのつらさげ小屋、1年中販売が出来るように30トンは保管できる貯蔵庫の整備などに充てることができました。今後も10年先を視野に入れた計画と実践を重ねて、大野を末永く発展させていきたいと考えています。」



↑入植100年を記念して建立された碑。



↑つらさげ芋と共同利用のトラクターと前田氏



# NPO法人顛娃おこそ会

(南九州市顛娃町)



↑「茶や、」: おこそ会のメンバーで本業の合間を縫ってリノベーションを実施。中に入ると茶畑の畝をモチーフにしデザインされたテーブルが並ぶ。



↑「塩や、」: 石垣地区の中心にあった塩屋さんをリノベーションし、多目的に使用できる空間。



顛娃おこそ会が発足したのは2005年、商工会の「よせなベクラブ」から発展し、地域活性化を目的として、以後活動を続けてきている。2007年にNPO法人化、現在は南九州市顛娃町となったが、顛娃地域の活性化のため、「観光プロジェクト」、「自然エネルギープロジェクト」の目的別のプロジェクトや「石垣(地区)プロジェクト」、「466(しろろ)プロジェクト」、「雪丸(地区)プロジェクト」などの地域拠点の基盤づくりのプロジェクトをメンバーがその都度担いながら活動をしている。活動の地域への貢献はこれまでも高く評価されている(JTB交流文化賞 団体部門、優秀賞など)。

現在、観光プロジェクトを推進しているのは、2015年8月からコーディネーターを務める福澤知香さんだ。

## 福澤さんは普段どのような活動をしているのだろうか。

「着地型観光のプログラムづくりです。これまで「茶寿会」で大野岳周辺での茶畑の景色とお茶を楽しんでいただくグリーン・ティーリズムの取り組みもありましたが、現在は空き家となったお茶農家さんのご自宅をリノベーションし、お茶を味わっていただくことはもちろん、お茶に関する各種体験もお楽しみいただける拠点となる「茶や、」をオープンしており、内容の充実を目指しています。南薩地域の冬といえば「大根槽」<sup>だいこんやくら</sup>。先日は香港からのお客様を大根畑でのお茶会でおもてなしして好評でした。取組の様子をみて、周囲の若い農家さんたちからもプログラムとして提供できないか?という提案もあるので、今後「畑旅(はたたび)」というネーミングで増やしていきたいです。農家さんに楽しいと思っていただけるプログラムづくりが大切だと思っています。」

## 体型プログラムから滞在プログラムへ

日帰りでの農業プログラムだけでは伝えきれない部分もあると感じ、滞在もしていただきたいと2016年には「暮らしの宿福のや、」(簡易宿泊所)もオープンした。現段階では、週末を中心とした稼働だが、宿としてだけでなく、活動の拠点としても利用があるという。

「顛娃を訪れてくださる方は遠方の方も多いのですが、気に入っていただいているという実感があります。そういう方々が安心して訪れられる“居場所づくり”が目標です。」

←「福のや、」: 空き家を借りて簡易宿泊所許可を取得。ハンドメイドのぬくもりが随所に。